

紀要

■設立40周年記念号

- 【小特集】東近江市相谷熊原遺跡をめぐって—縄文時代草創期の遺構と遺物
 「矢柄研磨器」雑考 —相谷熊原遺跡を理解するために— ……松室 孝樹(1)
- 鈴鹿山中の遺跡にみる選地の原理 —相谷熊原遺跡の理解に向けて— ……重田 勉(9)
- 土偶の機能・用途に関する理解の移ろい ……瀬口 眞司(15)
- * * *
- 高島市今津町弘川B遺跡出土の縄文土器(2) ……小島 孝修(28)
- 草津市志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群の様相 ……小竹森直子(42)
- 近江・湖東北部の埴輪 ……辻川 哲朗(48)
- 製鉄炉の設置方法について —源内峠遺跡1号製鉄炉の検討— ……大道 和人(73)
- 古代建築物構造ノート —掘立柱の再考— ……横田 洋三(81)
- 塩津起請文札と勧請された神仏 ……濱 修(86)
- 三重県桑名市西方廃寺出土の飛雲文軒瓦について
 —桑名市博物館所蔵品より— ……中西 常雄(92)
- 観音正寺と観音寺城跡(2) ……伊庭 功(95)
- 遺跡出土の化粧道具に関する覚書 —夏見城遺跡出土の毛抜きから— ……堀 真人(103)
- 将棋史研究ノート(5) 金将の役割 —金将の動きと配置から— ……三宅 弘(116)
- 「忍者」研究の現状と課題 ……阿刀 弘史(120)
- 文化遺産としての琵琶湖
 —「水」を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群— ……大沼 芳幸(124)
- 平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習を終えて ……具志堅有紀(142)
- 保存処理30年の記録 ……中川 正人(148)

24

紀 要

第 24 号

—設立40周年記念号—

2011.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

製鉄炉の設置方法について —源内峠遺跡 1号製鉄炉の検討—

大道和人

1. はじめに

今回検討を行う源内峠遺跡 1号製鉄炉は、滋賀県南部、湖南地域の瀬田丘陵に位置する。瀬田丘陵に分布する製鉄遺跡群は瀬田丘陵製鉄遺跡群と呼ばれている。瀬田丘陵製鉄遺跡群を構成する製鉄遺跡のうち、源内峠遺跡、木瓜原遺跡、野路小野山遺跡では発掘調査により箱形炉という形態の製鉄炉が検出されている(図1)。3遺跡の製鉄炉の斜面に対する製鉄炉の設置方法の変遷を検討すると、8世紀前半を前後する時期に製鉄炉の設置方法に大きな変化がみられることがわかる。

本論では、8世紀前半を前後する時期の瀬田丘陵製鉄遺跡群で検出された製鉄炉を検討し、8世紀前半を前後する時期の製鉄炉設置方法の変化が、何に起因しているのかについて考えていきたい。

2. 問題の所在

筆者は以前、近江の中でも製鉄炉の調査事例が増加してきた、瀬田丘陵製鉄遺跡群で検出された製鉄炉の炉底や地下構造の形態分類を行い、その編年作業を行った(大道2007)。瀬田丘陵で検出された製鉄炉は7世紀から8世紀の時期のもので、すべて箱形炉に分類できる(図2)。

これらの製鉄炉は、斜面に対する製鉄炉の設置方法、製鉄炉の長軸の長さにより、以下の3種類に分類できる。

I類 製鉄炉の長軸が等高線に平行する「横置き」で、長軸の長さが2m前後の規模をもつ平面形がやや細長い長方形を呈する箱形炉。

II類 製鉄炉の長軸が等高線に平行する「横置き」で、長軸の長さが1m前後の規模をもつ平面形が長方形を呈する箱形炉。

III類 製鉄炉の長軸が等高線に直交する「縦置き」で、長軸の長さが2m前後の規模をもつ平面形がやや細長い長方形を呈する箱形炉。

また、地下構造の構築法や出土した土器などの検討から、瀬田丘陵製鉄遺跡群の製鉄炉は以下で示す5つの時期の変遷を経ていることを推定した。

1期 おおむね660年前後に比定され、源内峠遺跡 4号製鉄炉(I類)が属する。

2期 おおむね685年前後に比定され、源内峠遺跡 2・3号製鉄炉(I類)が属する。

3期 おおむね700年前後に比定され、木瓜原遺跡 S R-01下層炉(I類)、野路小野山遺跡製鉄炉 A群 7号炉(II類)、源内峠遺跡 1号製鉄炉(III類)が属する。

4期 おおむね715年前後に比定され、木瓜原遺跡 S R

-01(I類)が属する。

5期 おおむね720年から760年頃に比定され、野路小野山遺跡製鉄炉 C群 S X-01(III類)、野路小野山遺跡製鉄炉 B群 1号炉(III類)、野路小野山遺跡製鉄炉 B群 2号炉(III類)が属する。

瀬田丘陵製鉄遺跡群の製鉄炉の変遷をみると、3期から4期、8世紀前半を前後する時期に、製鉄炉の長軸が等高線に平行する「横置き」の製鉄炉 I類・II類から、製鉄炉の長軸が等高線に直交する「縦置き」の製鉄炉 III類に変化していることがみてとれる。

瀬田丘陵製鉄遺跡群の西側、南郷地域にも南郷製鉄遺跡群を構成する製鉄遺跡が分布しており、南郷遺跡、南郷芋谷南遺跡、平津池ノ下遺跡では製鉄炉の発掘調査が実施されている(図1・3)。南郷遺跡で検出された製鉄炉は7世紀後半に比定され、I類に分類される(田中編1988)。芋谷南遺跡で検出された製鉄炉は7世紀末に比定され、I類に分類される(青山1998)。平津池ノ下遺跡で検出された製鉄炉は8世紀後半に比定され、III類に分類される(大津市教育委員会1995)。このように南郷製鉄遺跡群でも、瀬田丘陵生産遺跡群の製鉄炉と同様、8世紀前半を前後する時期に、製鉄炉の長軸が等高線に平行する「横置き」の製鉄炉 I類から、製鉄炉の長軸が等高線に直交する「縦置き」の製鉄炉 III類に変化していることがわかる。

以上の検討結果から、近江南部地域の瀬田丘陵製鉄遺跡群と南郷製鉄遺跡群では8世紀前半を前後する時期に、製鉄炉の長軸が等高線に平行する「横置き」の製鉄炉 I類・II類から、製鉄炉の長軸が等高線に直交する「縦置き」の製鉄炉 III類に変化していることがわかる。この変化は製鉄操業の具体的方法の変化や生産目的の鉄種の変化などに起因し、製鉄技術の系譜を追う上で重要な要素である可能性がある。近江南部の製鉄遺跡の中では、源内峠遺跡において同一遺跡内において I類(4号製鉄炉、2・3号製鉄炉)から III類(1号製鉄炉)への変遷を追うことができる。特に源内峠遺跡 1号製鉄炉は III類の初現と考えられる遺構なので、III類が誕生した理由を探る手がかりがあるかもしれない。

以下では、源内峠遺跡 1号製鉄炉と出土遺物を検討し、その特徴について考えていきたいと思う。

3. 源内峠遺跡 1号製鉄炉の検討

源内峠遺跡は大津市瀬田南大萱町に位置し、瀬田丘陵製鉄遺跡群の中でも古手の7世紀後半に比定される製鉄遺跡である。1977年・1983年に試掘調査が行われているが(近

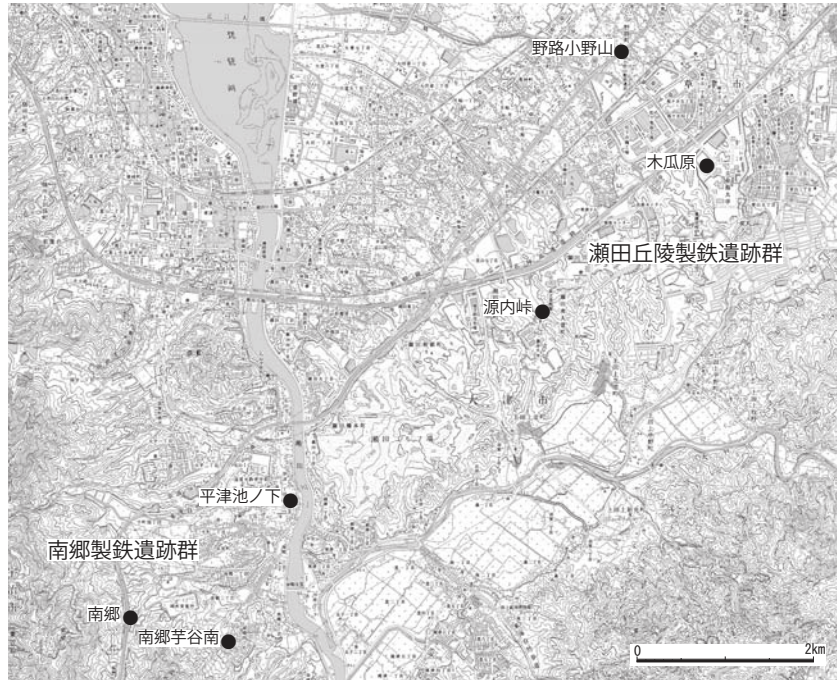


図1 瀬田丘陵製鉄遺跡群と南郷製鉄遺跡群の主な製鉄遺跡

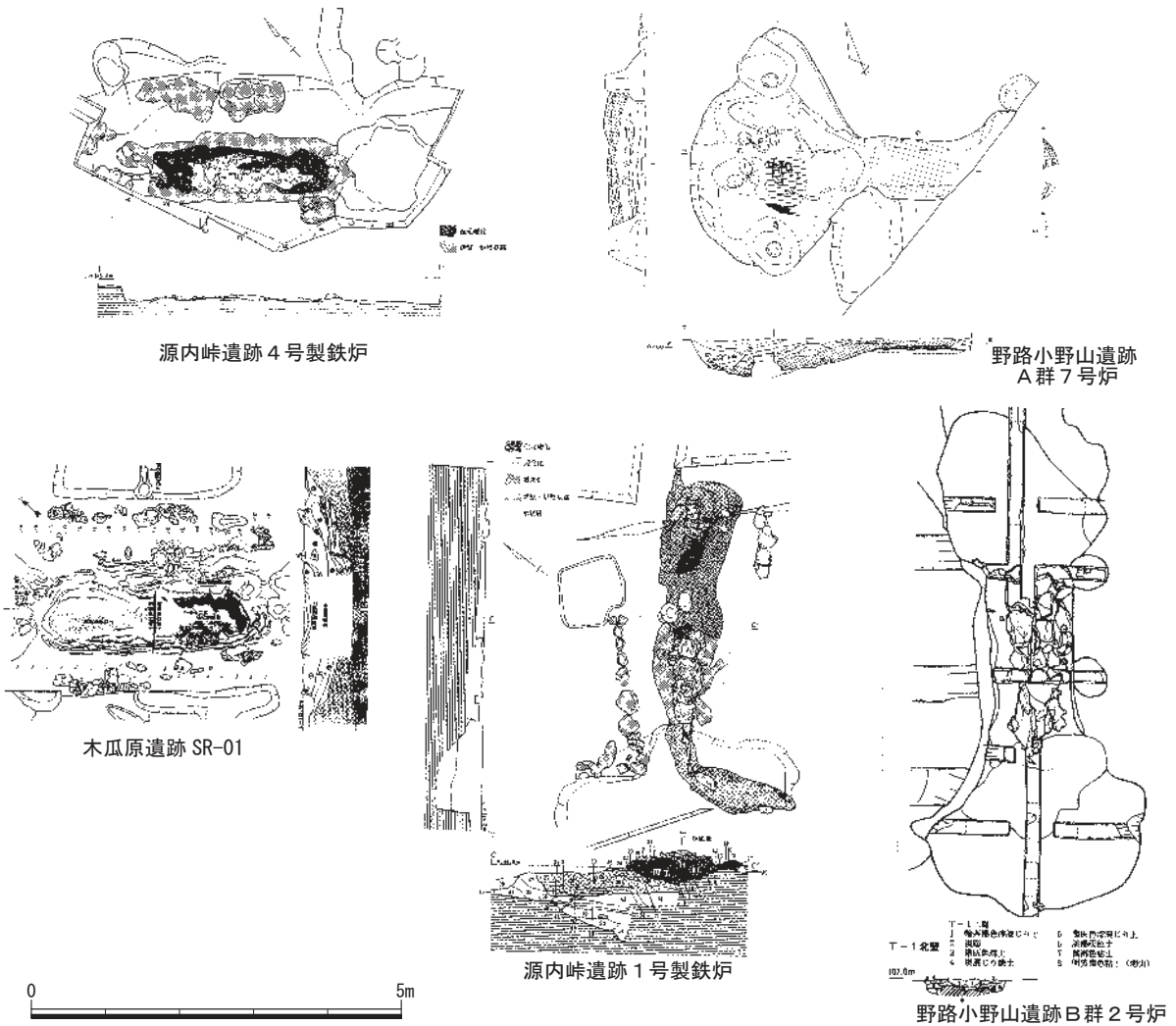


図2 瀬田丘陵製鉄遺跡群の製鉄炉

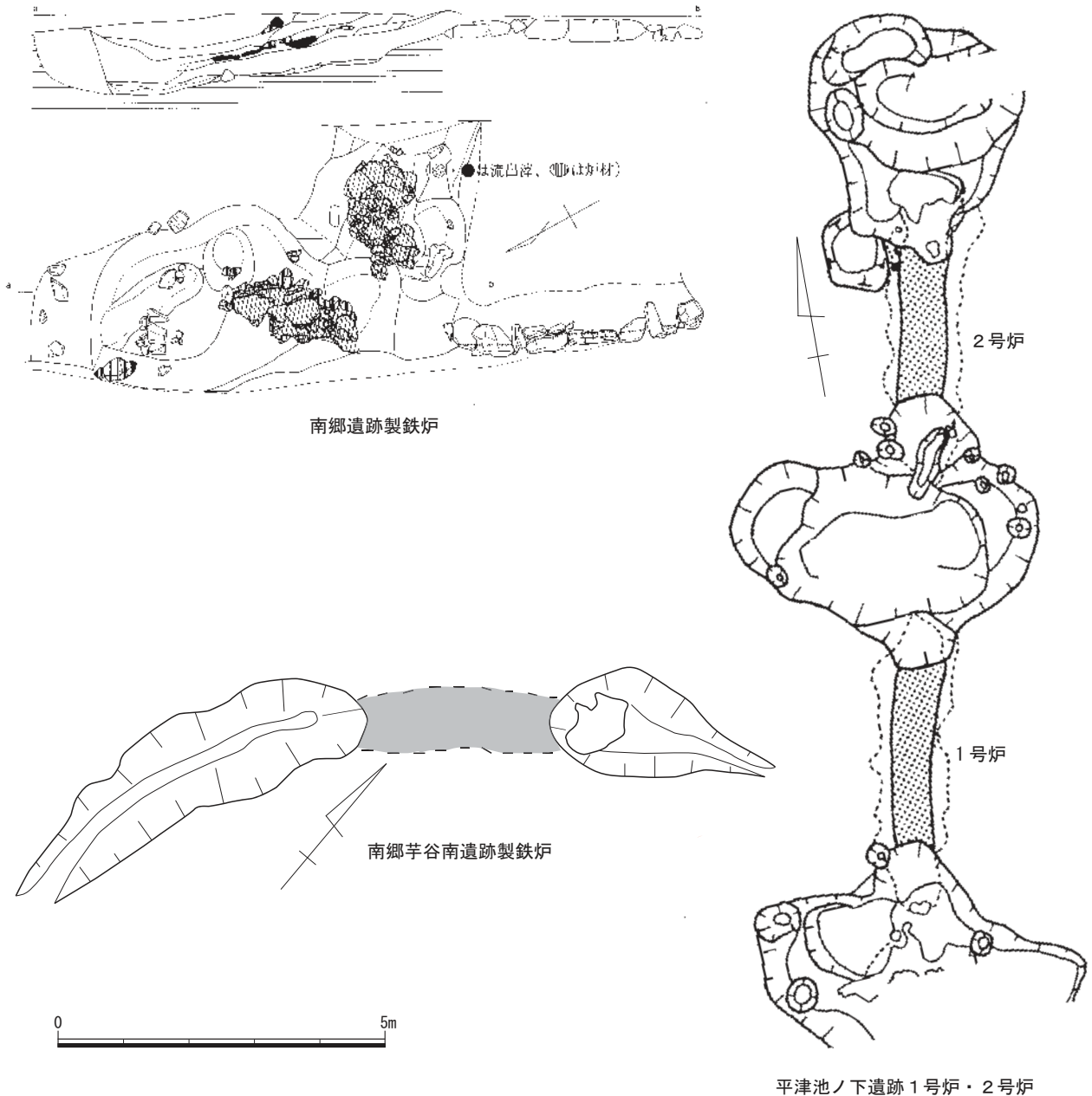


図3 南郷製鉄遺跡群の製鉄炉

藤1978、丸山・濱・喜多1986)、1997・1998年に発掘調査が実施され、筆者が調査を担当した(大道編2001)。発掘調査の結果、1号から4号まで製鉄炉を4基検出した。4号、3号、2号、1号製鉄炉の順に製鉄炉は構築され、古い製鉄炉での操業により排出された排滓場を再び整地して新しい製鉄炉を構築している(図4)。

1号製鉄炉は、南から北に伸びる緩やかな丘陵裾部に、1号製鉄炉操業以前の排滓層と整地土を用いて平坦面を造成し、その平坦面上に炉の長軸を等高線に対して直交して構築されたⅢ類の箱形炉である。炉底には粘土を貼り付けている。炉の下部構造は長さ4.0m、幅1.6m、深さ0.4mの土坑を掘り込み、その中に木炭や木炭混じりの砂質土を充填する(図5)。

炉底には炉の西部と東端の2か所に鉄滓が残っていた。炉の中央に鉄滓がないのは、その部分に里道が走っていたため、削平を受け欠損したと考えられる。製鉄操業終了時には、長さ2.9m、最大厚9cmの鉄滓が製鉄炉内と流出孔に残留していたと考えられる。製鉄炉と流出孔から出土した鉄滓の総重量が37kgであるので、操業終了時には製鉄炉内と流出孔に60kg前後の鉄滓が残留していたと推定される。

製鉄炉内から出土した鉄滓(炉底塊)の横断面形は凸状を呈し、上面幅は20cm、下面幅は41cmをはかり、上面幅が下面幅より一回り狭い。上面の幅が操業終了時の炉内幅と考えられ、その幅は20cmということになる。炉底塊の上面は滓は木炭痕による凹凸が顕著で、炉壁起因のガラス質滓が付着していることから、操業中もしくは操業後に崩落し

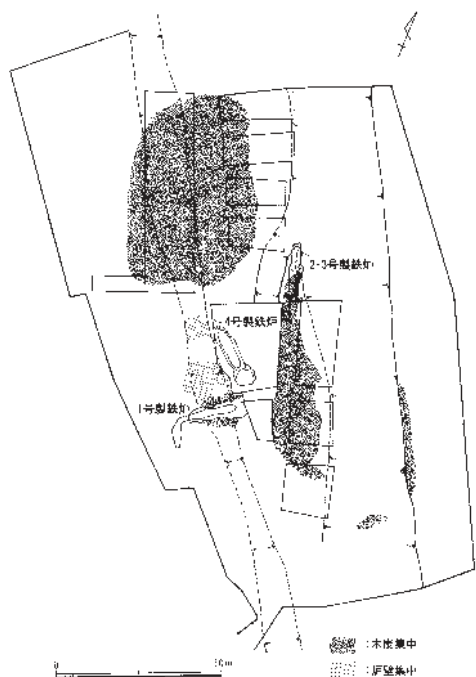


図4 源内峠遺跡調査区

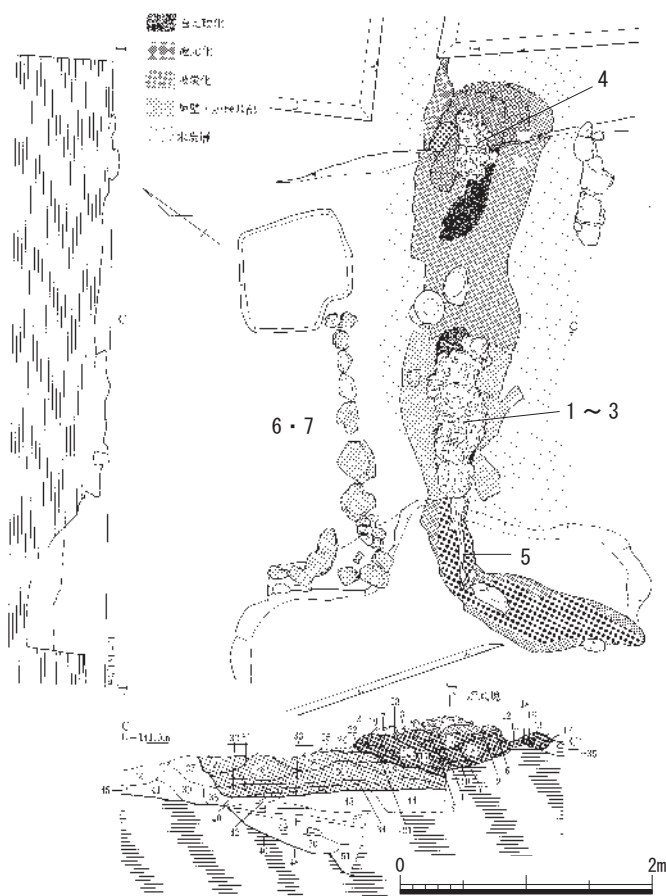


図5 源内峠遺跡1号製鉄炉
(平面図の番号は図6・7の番号に対応)

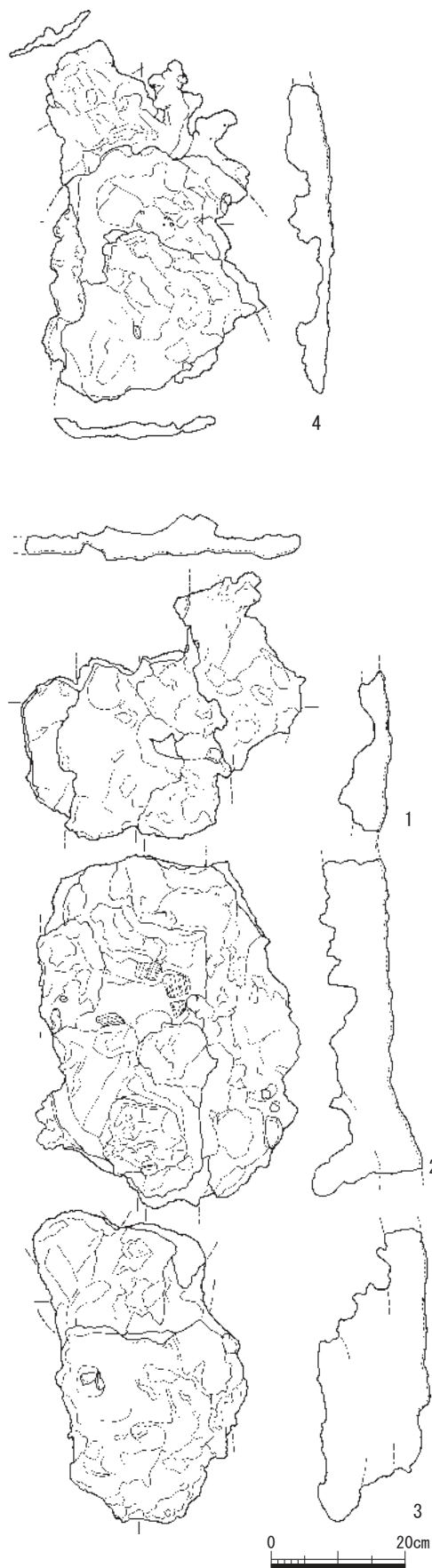


図6 源内峠遺跡1号製鉄炉出土鉄滓



図7 源内峠遺跡1号製鉄炉出土鉄滓・炉壁



図8 源内峠遺跡4号製鉄炉
(平面図の番号は図9の番号に対応)

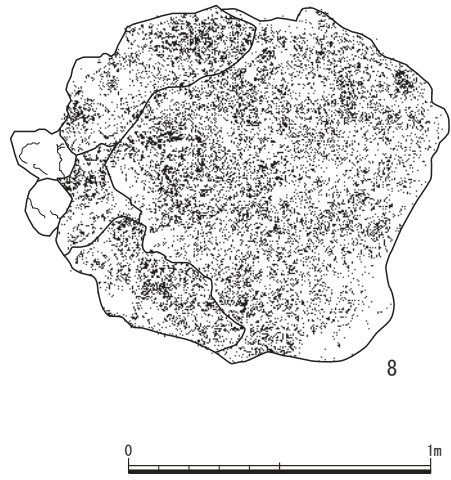


図9 源内峠遺跡4号製鉄炉
南排滓坑出土流出滓

てきたものが滓化した可能性が高い。下面は横断面形がU字形を呈し、底部付近の滓は比較的緻密である。

炉の西部で検出された鉄滓（図6-1～3）は、炉内から炉外方向に炉底塊・流出孔滓・流出滓が繋がった一連のものである。小口部分の鉄滓は、小口南側の流出孔滓と流出滓が北方向に大きく折れ曲がり、小口北側の流出孔滓と流出滓の上に重なっている。小口北側では幅12cm、小口南側では幅13cmの流出孔滓を確認できることから、操業終了時には炉西小口に2個の流出孔が存在していたことになる。

また、炉の東端で検出した鉄滓（図6-4）も、炉内から炉外方向に炉底塊・流出孔滓・流出滓が繋がった一連のものである。流出滓は2本存在するが、流出孔滓は重なりあっていることから、操業終了時には小口中央部に流出孔が存在していた可能性が高い。流出孔滓の幅は18cmをはかる。

炉の平面形は隅丸長方形を呈し、炉および周辺に残留していた鉄滓の観察から、操業終了時の炉内側の規模は、長さ2.4m、幅0.2mに復元できる。炉底は西へ3.5°傾斜している。

西排滓坑上面では炉西部の炉底塊底面より続く流出滓（図7-5）が操業終了時のままの状態出土した。流出滓は炉底塊底より1m程炉の西中軸方向に流れ、そこから南方向に折れ曲がり40cm程流れた状態で遺存していた。なお、東側排滓坑は1977年度の試掘により大部分が消滅しており、土層観察畦が残るのみで詳細は不明である。

炉の北側では東西3.1m、南北1.5mの範囲で炉壁が集中して出土した。出土した炉壁は、操業時の北側の炉壁がそのまま倒れたものと推測される。炉壁粘土にはササと砂粒が混和されている。中には径3cm程もあるチャートを含む炉壁も出土している。炉壁胎土については金属学的分析を行っている。顕微鏡組織観察では多数の石英質らしき鉱物の混和が指摘されており、耐火度の測定からは古代の製鉄炉の炉壁としては耐火度は高い性状であるとの結果を得ている。

炉の北側から集中して出土した炉壁の中には複数の送風孔痕跡を確認できる大型の炉壁片も出土している（図7-6・7）。炉壁の送風孔は炉底から上10cm付近に穿たれ、内側先端部では直径2～4cmの円形、外側では二等辺三角形を呈する。芯々間隔は狭いものでは17cm、多くは20～25cm程で、3連の送風孔をもつ炉壁では26cmをはかる。炉壁に穿たれた送風孔底面の穿孔上下角度は水平であるものが多い。また送風孔上端の穿孔上下角度は20～30度のものが多い。

1号製鉄炉の製鉄操業で使用された鉄鉱石については、高磷系の鉄石原料であるとの化学組成分析結果が得られている（大澤・鈴木2001）。

また、1号製鉄炉の操業において生産された鉄塊系遺物の金属学的分析結果からは、生産鉄種はフェライト組織か

ら白鑄鉄組織まで幅広いものであったとの結果が出ている（大澤・鈴木2001）。

4. 製鉄炉の検討から見えてくるもの

前章では源内峠遺跡1号製鉄炉についてやや詳しく検討してみた。以下では、1号製鉄炉について、源内峠遺跡4号製鉄炉の調査結果（図8）と比較することによって特徴を抽出し、I類からIII類への変化、III類出現の契機は何であったのかについて考えていきたい。

1号製鉄炉と4号製鉄炉の違いとして、炉およびその周辺に残留していた鉄滓、特に炉底塊部分の滓の形状・質が異なっている点を指摘できる。4号製鉄炉では炉底塊が西側に偏った状態で残留しており、炉底塊の中には金属鉄が散らばった状態で遺存していた。炉底に密着した炉底塊は薄く、厚さは4cm程である。一方、1号製鉄炉の炉底塊は上面が木炭痕や炉壁起因のガラス質滓、底部付近が比較的緻密な滓で構成される。炉底塊内の金属鉄の残留も少ない。

製鉄炉内側の幅についても両者は異なる。4号製鉄炉は炉底の遺存状況と炉底塊の残存状況から50cm程に復元できる。一方、1号製鉄炉は炉底塊の横断面形状と滓質から20cmに復元でき、4号製鉄炉と比較するとかなり狭いという点を指摘できる。1号製鉄炉の炉内幅が狭いという要素との関連では、1号製鉄炉の炉壁粘土の耐火度が古代の製鉄炉の炉壁としては高いとする耐火度測定の結果が出ている（大澤・鈴木2001）。この結果は、操業中炉壁の浸食を抑え込むとする効果に結び付いた可能性がある。なお、1号製鉄炉に伴う炉壁に関しては、送風孔下の炉壁内面の浸食度合いが弱いとする意見もあり、傾聴に値する⁽¹⁾。

流出滓に関しては、4号製鉄炉の南排滓坑上面で炉底塊・流出坑滓から続く長さ125cm、幅125cmを測る巨大な流出滓が検出された。当流出滓は滓の一単位の幅が20cm前後と広がりを見せ、何層にも重なりあって巨大なものとなっている。一方、1号製鉄炉では西排滓坑上面で炉西部の炉底塊底面より続く流出滓が検出された。当流出滓は長さ約110cm、幅10cm前後をはかる、炉内から一気に流れ出た滓で、4号製鉄炉南排滓坑の巨大な流出滓とは全く異なる様相を呈している。

長軸方向の炉底の傾斜についても違いが顕著で、4号製鉄炉はほぼ水平であるのに対し、1号製鉄炉は西へ3.5°傾斜している。

古代の製鉄炉に残留する鉄滓の検討を行った真鍋成史氏は、箱形炉に残留する鉄滓をその形状から3分類した。さらに、たたら製鉄国選定保存技術保持者である木原明氏が指導した製鉄実験で生成した鉄滓と製鉄炉に残留する鉄滓を比較することによって、3分類した鉄滓の形状から推定される生成鉄について言及している（真鍋2009）。源内峠遺跡で検出された製鉄炉を検討する際の基準となるので、以下にやや詳しく記す⁽²⁾。

1類 製鉄炉に残留する鉄滓は中央部が欠けたリング状を呈し、小口両側に2個の流出孔を有する。鋳鉄を生成したとする。鳥根県今佐屋山製鉄遺跡の炉をモデルに交野市教育委員会が実施した製鉄実験で、炉底にできた鋳塊（炭素量0.2～2.1%の鋼主体）の周りに鉄滓がリング状に残されていた実験結果を根拠とする（真鍋編2002）。実験では鋳鉄の下には小さな鋳粒や滓片が生成していた。操業前半段階では小口中央の流出孔から鉄滓を流し出していたが、操業が長時間に及んだ場合には中央の流出孔は鋳鉄の成長により塞がるため、小口両端の2個の流出孔から滓を流し出すようになる。流出滓は緻密で重量感がある点を特徴とする。

2類 製鉄炉に残留する鉄滓は炉底全体に広がり、小口中央のみに流出孔を有する。銑鉄を生成したとする。岡山県大蔵池南製鉄遺跡の炉をモデルに愛媛大学が行った製鉄実験で、銑鉄が炉外に流れ出たこと、操業後炉を解体したところ、底には鉄分の少ない滓が溜まっていた実験結果を根拠とする（真鍋・大道2006）。操業中は小口中央部の流出孔から気泡が多く軽い滓と銑鉄とが交互に流し出されており、鉄と滓との分離がうまく進んでいたことが予想される。

3類 製鉄炉に残留する鉄滓は厚みがあり、流出滓が生じず、重量感がある。操業が不調であったことから小鉄塊しか生成していない。鳥根県今佐屋山製鉄遺跡の炉をモデルに鳥根大学が実施した製鉄実験で、鋳鉄生成を目的としたが、操業途中、輻が故障したため炉内温度が低下し、炉外に滓を一度も流すことができず失敗に終わった実験結果を根拠とする（田中義1995a・1995b）。炉底には未還元砂鉄や小鉄塊（炭素量0.2%以下の鍊鉄主体）の入り混じった大きな炉底塊が溜まっていた。

真鍋氏は、今回検討を行った源内峠遺跡4号製鉄炉と1号製鉄炉に関して、4号製鉄炉については1類、1号製鉄炉については2類としている。さらに、瀬田丘陵製鉄遺跡群の木瓜原遺跡SR-01については1類、野路小野山遺跡B群2号炉については2類としている。

ここで注目されるのは、真鍋氏が1類（以下「真鍋分類1類」とする源内峠遺跡4号製鉄炉と木瓜原遺跡SR-01は、製鉄炉の長軸が等高線に平行する「横置き」の製鉄炉I類であり、真鍋氏が2類（以下「真鍋分類2類」とする源内峠遺跡1号製鉄炉と野路小野山遺跡2号炉は、製鉄炉の長軸が等高線に直交する「縦置き」の製鉄炉Ⅲ類であるという、真鍋氏の分類と製鉄炉の設置方法とに対応関係がみられることである。つまり、8世紀前半を前後する時期の瀬田丘陵製鉄遺跡群における製鉄炉I類からⅢ類への変化は、真鍋分類1類から2類への変化に対応している可能性があるのである。真鍋分類1類の製鉄炉に残留する鉄滓の形状から推定される生成鉄は鋳鉄、真鍋分類2類の製鉄炉に残留する鉄滓の形状から推定される生成鉄は銑鉄と

推定されることから、製鉄炉I類の目的生成鉄は鋳鉄、製鉄炉Ⅲ類の目的生成鉄は銑鉄であった可能性がある。目的生成鉄という観点から、今回検討した源内峠遺跡4号製鉄炉から源内峠遺跡1号製鉄炉への変遷は、瀬田丘陵製鉄遺跡群の製鉄操業の変遷を考える上で一つの画期となった可能性が指摘できるのである。

しかし、1号製鉄炉が単純に真鍋分類2類に分類できない要素もいくつか存在している。真鍋分類2類は排滓孔が小口中央部のみに存在することがその特徴の一つであるが、1号製鉄炉には残留している滓の観察から、操業終了時には両小口の両端、2個の排滓孔が存在していることが確認されている。

また、1号製鉄炉西部の流出滓は炉の小口というよりは、かなり下の炉底から流れ出しており、操業の危機的状況を回避するために、滓を炉外へ流出させた操業痕跡を物語る可能性も捨てきれない。

さらに、金属学的分析調査を対象にした鉄塊系遺物については、出土鉄塊系遺物の中でも大型の金属鉄を含むものを選別したにも関わらず、1号製鉄炉で銑鉄を主体的に生産していたとする積極的根拠を示す結果は得られていない。

以上の点を考慮すると、源内峠遺跡1号製鉄炉段階では、銑鉄を目的生成物とする製鉄操業技術が確立していたとするには、検討の余地が残されているように思える。I類の4号製鉄炉からⅢ類の1号製鉄炉への変化の要因として、1号製鉄炉の長軸方向に傾斜がみられる点、傾斜下方向に主排滓が行われている点を重視し、生産目的の鉄質の変化という視点とともに、製鉄操業における排滓方法の変化や、より効率的な生産、生産量の増加という視点からも製鉄操業をみていく必要があるのではないかと思う。変化の要因の具体的意味づけについては今後の課題となろう。

5. まとめ

小稿では、8世紀前半を前後する時期に滋賀県瀬田丘陵製鉄遺跡群内で横置きの製鉄炉から縦置きの製鉄炉へと製鉄炉設置方法が変化する要因を考えるため、まず、瀬田丘陵製鉄遺跡群で最古の縦置き製鉄炉である源内峠遺跡1号製鉄炉をやや詳しく検討し、その特徴的要素を見出した。そして、1号製鉄炉より時期的にやや古い横置きの製鉄炉である源内峠遺跡4号製鉄炉の要素と比較し、その相違点を抽出した。そして、主に残留する鉄滓の検討を行った先行研究に導かれながら、横置きから縦置きへの製鉄炉設置方法の変化の要因を、製鉄操業や生産目的の鉄質や量に対する技術革新の結果ではないかとする仮説を導き出した。

ただ、先行研究ではこの変化を、目的とする生成鉄の操業方法の違いと結論付けたが、小稿では、先行研究の結論を肯定的にとらえることはできるとしても、その技術が源内峠遺跡1号製鉄炉段階に確立していたとする見解には、やや慎重であるべきではないかと結論付けた。

古代において、鋳鉄と銑鉄を目的生成鉄として確立した別体系の技術体系が存在していたのかについての検討、そしてもし存在していたとすれば、その技術体系が確立したのはいつで、どのような時期的変遷を経て、中世・近世へ繋がっていったのか、あるいは繋がっていないのかの検討は今後の課題となろう。

註

- (1) 木原明氏より御教示を受けた。
- (2) 真鍋氏の使用する用語、文章表現を改変したところがある。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 青山 均 (1998)「滋賀県大津市芋谷南遺跡」『日本考古学年報49 (1996年度版)』日本考古学協会
- 大澤正己・鈴木瑞穂 (2001)「源内峠遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『源内峠遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 大津市教育委員会 (1995)『平津池ノ下遺跡現地説明会資料』
- 大橋信弥編 (1990)『野路小野山遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・草津市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 大道和人 (2005)「源内峠遺跡の調査概要と歴史的意義」『滋賀文化財だより』No.298、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 大道和人 (2007)「製鉄炉の形態からみた瀬田丘陵生産遺跡群の鉄生産」『考古学に学ぶⅢ』（同志社大学考古学シリーズⅨ）同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 大道和人編 (2001)『源内峠遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 近藤 滋 (1978)『源内峠遺跡試掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 田中勝弘編 (1988)『南郷遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 田中義昭 (1995 a)「古代鉄生産（箱形炉）の復元的実験（Ⅰ）（Ⅱ）」『第14回横田たたら研究会発表資料』横田史談会
- 田中義昭 (1995 b)「島根県横田町における古代たたら製鉄の実験」

- 『産業考古学会第19回総会 研究発表講演論文集』産業考古学会
- 藤居 朗 (2003)『野路小野山製鉄遺跡発掘調査報告書』草津市教育委員会
- 真鍋成史 (2009)「製鉄炉に残された鉄滓からみた古代日本の鉄生産」『古代学研究』第182号、古代学研究会
- 真鍋成史編 (2002)『古墳時代の鉄製錬・鍛冶再現実験記録』交野市教育委員会
- 真鍋成史・大道和人 (2006)「3号炉」『日本列島における初期製鉄・鍛冶技術に関する実証的研究』（課題番号15320109平成15～17年度科学研究費補助金基礎研究B研究成果報告書）愛媛大学法文学部
- 丸山竜平・濱 修・喜多貞裕 (1986)「滋賀県下における製鉄遺跡の諸問題」『考古学雑誌』第72巻第2号、日本考古学会
- 横田洋三編 (1996)『木瓜原遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

挿図典拠

- 図1 大道作成。
- 図2 源内峠遺跡4号製鉄炉は大道編2001に拠る。野路小野山遺跡A群7号炉は大橋編1990に拠る。木瓜原遺跡S R-01は横田編1996に拠る。源内峠遺跡1号製鉄炉は大道編2001に拠る。野路小野山遺跡B群2号炉は藤居2003に拠る。
- 図3 南郷遺跡製鉄炉は田中編1988、南郷芋谷南遺跡は大津市教育委員会1995に拠り、一部改変。平津池ノ下遺跡1号炉・2号炉は大津市教育委員会1995に拠り、一部改変。
- 図4 大道2005に拠る。
- 図5 大道編2001に拠り、一部改変。
- 図6 大道編2001に拠り、一部改変。
- 図7 大道編2001に拠り、一部改変。
- 図8 大道編2001に拠り、一部改変。
- 図9 大道編2001に拠り、一部改変。

（おおみち かずひと：滋賀県立安土城考古博物館 主任）

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていききたい。

その他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南省夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市観音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなってきていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるように伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いする所である。

編集担当（T-T）

紀 要 第24号 —設立40周年記念号—

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.24 2011.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage